



糠平 → 静内

8班 短食 2 の 3

(大塚, 奥田, 大呂, 大西, 石井)
(池田, 揚野, 真田, 門田)

7月23日(第9日目)

目が覚めると耳慣れないザーザーという音が聞えて来る。「ウアー雨だ。」とがっかりしながら窓を開けると、秋の空を想わせるような青い色が目に飛び込んで来た。旅館の前の岩を噛む清流を雨の音に間違えるなんて…と、自分のあわてぶりに苦笑しながらも、晴天とわかれば元気百倍。意気揚々とバスに乗り込む。道の両側に咲き乱れるアヤメを横目で楽しみながら、又、最上とは言い難い黄金道路の名前の由来を聞きながら、バスの適度の振動に刺激されてか、普段より活発に働く胃の要求に応じて、手は絶えずキヤラメル、センペイ、その他を口に運ぶ。そのうちにバスは昼食予定の広尾の浜辺に着いた。さて先ず最初に川原で御弁当を開く。御飯がまずい、ソーセージが小さい。又々塩鮭、昆布が入っている等とガヤガヤ、シーン。最後に集めて見れば、皆残さず道内清掃食べ残し始末係の方に、ほめられるのではないかしらと思うほどの食欲を示していた。海辺に出て、網のつくろいを見たり、石投げで消化を助けたり。この辺は月見草やクローバーが一面に咲いている。15分位の間に、4つ葉のクローバーを4つも見つけたことに気をよくしながら広尾を出発した。

次の襟裳岬は更に雄大な景色だった。青い空、青い海、白い灯台、白い波飛沫、しかし、この北海道南端の美しさ、明るさは南国のあの底からの隋れやかさと違い、どうしても解らないが、一種のわびしさが漂っていると感じたのは、あながち、私だけの旅によるセンチメンタルな想いではなかっただろうと思う。又、原生花園で見た時は余り好きにはなれなかったハマナスの花が、今こうして強い潮風に、薄い紅色の花びらを震るわせているのを見ると、急にかけよつて風から守つてやりたいような気持ちにさえなつた。

我々の班は皆、研究意欲旺盛で岬に着くとすぐに昆布を買って来て、名物鼻まがりならず、口をまげ、咽をからしながらの試食。(直ぐにジュース、コーラを飲み走る。)
しかし、全てを見て、全てを味わうことをモットーとしている我々は、これにへこたれた

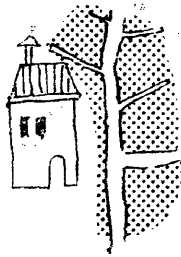
わけではない。何事も研究はつらい？

自然の岩を利用したトンネルを通りぬけながら、静内のウグイス谷観光ホテルへと向かう。が、予定時刻の16時30分を過ぎても、旅館の影も形も見えてこない。左手に広がる大平洋に沈みゆく夕日に歓声を上げている間はまだ良かったが、貧困さをむき出しにした漁村がただ夕刻の光の中に過ぎてゆくばかりで、だんだんと不安になつてくる。

その待ち焦れた宿に着くこと、18時30分。皆、空腹の為、目をまわし足をガクガクいさせながら、さつそく大広間へ。しかし、又、待てど暮らせど食事が出て来ない。気の早い人が台所へのぞきに行くと、何んと／＼御飯を漉している最中であつた。カツクン!! 入浴後部屋に帰ると、おにぎりが来ていた。小さな旅館で人手不足の様であつたが、家庭的なところが嬉しかった。

朝食では、旅に出て始めての梅干し。夜はおにぎり……何んだかチヨツピリ家が恋しくなつた。

静内 → 登別



9班 短食2の3

(河原崎, 寒川, 吉川, 高坂
近藤, 斉藤, 笹原, 瀬野)

7月24日(第10日目)

9時に出発して、やつとこさで、北海道と言えばアイヌ部落と口に出るほど有名な、我々待望の白老のアイヌ部落へ到着した。小さな部落で家々もみすばらしく観光用の店がほとんどである。広場の隅の方に、熊まつりにいけにえとしてささげられたという熊の頭の骨などが、木の槍にさされて、たてかけてあり無気味であつた。次に老人、婦人四人のアイヌ人の踊りを見た。手を打ちながら声をかけ合い、一定の円をまわるだけであつたが、何やら、真に迫まるものを感じた。しかし、これらの踊りも、只、観光客のためにのみ見せるもので、もちろん現在、実際に行われているものではあるまい。この婦人達は、どういう気持で、我々にこの踊りを見せているのだろうか、とフト思つたりした。次にアイヌ人の小屋に入つて、尊長、宮本トモムラの話聞く。あごひげの白く長い老人であつたが、なかなかシヤンとしていて健康そうであつた。その中には、昔のアイヌ人の使用した用具